

聖書：使徒 11：1～18

説教題：沈黙と賛美

日時：2013年12月1日

使徒の働きの著者ルカは 10 章 1 節～11 章 18 節で、神が異邦人宣教の御心を示された経緯について記しています。ここを 3 回に分けて見っていますが、今日はその 3 回目となります。すでにペテロに与えられた幻と、コルネリオに与えられた幻について、2 回ずつ見ましたが、今日の箇所でもう 1 回そのことが触れられます。同じ内容の繰り返しで、今日の私たちには少しくど過ぎると思われるかもしれませんが、それだけこの事柄は重要であるとルカが思っていることの現れでしょう。

今日の舞台はエルサレムです。すでにユダヤの人々にも、異邦人たちが神の言葉を受け入れたというニュースが届いていました。そこへペテロが帰って来ます。歓迎されるかと思ったらそうではありません。むしろ待ち構えていたユダヤ人たちから、非難の集中砲火を浴びます。「あなたは割礼のない人々のところに行って、彼らといっしょに食事をした。」欄外の別訳を見ると、厳しく問う言い方になっています。「なぜ、あなたは割礼のない人々のところに行って、彼らといっしょに食事をしたのか。」これは「あなたは何ということをしたのか」と咎める問いでしょう。してはならないことをあなたはした！という断罪の言葉でしょう。

問題の争点は 3 節にあるように、ペテロが割礼のない人々すなわち異邦人と食事をしたということです。ユダヤ人と異邦人は食べ物に違いがありました。ユダヤ人は律法に従って汚れた動物は食わず、きよいものだけを食しましたが、異邦人にそんな区別はありません。そんな彼らと一緒に食卓を囲んだら、汚れるに決まっている。しかも相手がペテロの家に訪ねて来たならまだ話は分かりますが、ペテロは自分から異邦人のところへ出かけて行って彼らと食事の交わりをした。これは一体どういうことか。あなたは 12 使徒のリーダーでありながら、率先して律法違反の行動を取ったのか。もう汚れに無頓着な人になったのか。まさか割礼のあるなしはどうでも良いことのように考えているのか。イスラエルに与えられている光栄や特権を投げ捨てるつもりなのか。このように異邦人宣教の御心はそう簡単に当時の教会に受け入れられることではなかったのです。何度も繰り返して記される書き方にはやはり意味があったのです。

そんなエルサレムのユダヤ人クリスチャンに対し、ペテロは口を開いて説明し始めます。4 節に「事の次第を順序正しく説明して」とある通り、彼は 4 つの場面に分けて、これまで受けた神の導きについて冷静に証しします。

第一の場面はヨッパにおけるペテロが見た幻です。四隅をつりさげられた大きな敷布のような入れ物が天から降りて来て、その中にあらゆる動物が入っていました。ユダヤ人にとって汚れた動物も混じっていました。なのに天から「ペテロ。さあ、ほふって食べなさい。」という声があった。ペテロは「主よ。それはできません。私はまだ一度も、きよくない物や汚れた物を食べたことはありません。」と答えたものの、また天から声が出て「神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない。」という答えがあった。これが 3 回も繰り返された。ペテロがここで強調していることは何でしょうか。それは神のイニシヤティヴです。これはペテロの考

えとか、ペテロの解釈から始まったことではありません。むしろ彼は抵抗しました。しかし神がこれを疑う余地のないほど、繰り返して示されたのです。

第二の場面は、幻の直後、カイザリヤから遣わされた3人がペテロの家の前に来たことです。その時、御霊はペテロに「ためらわずに、その人たちといっしょに行くように」と語りました。12節の「ためらわずに」という言葉は、欄外にある通り「何の差別もつけずに」という言葉です。「神がきよめた物をきよくないと言ってはならない」という幻の後に、異邦人との面会にあたって、御霊が「何の差別を付けないように」と示された。これも神のイニシヤティヴによることです。ペテロが意見を差し挟む余地はありませんでした。

第三の場面はコルネリオの家です。彼の家に入って尋ねると、コルネリオにも御使いの啓示があったと言います。「ペテロと呼ばれるシモンを招いて、その言葉を聞け！」との指示があった。これも神の働き、神のわざです。

そして第四の場面は、聖霊が天から下ったことです。ペテロが話し始めている最中に、突然天から聖霊の注ぎが生じた。これは益々ペテロの自由になることではありません。ただただ神の主権によるみわざです。ペテロが強調していることは、これはあの最初の時に私たちの上へ下ったのと同じ聖霊の注ぎであったということです。すなわち使徒の働き2章のペンテコステの出来事と全く同じことが異邦人の上にも生じた。神はここに重大なメッセージを語っている。すなわち神は異邦人にも、ユダヤ人と同じ聖霊の恵みを注いでおられる。神は差別を付けておられない。同一の聖霊が彼らにも注がれた。そこでペテロは言います。神がこのようにご自身の御心を疑う余地なく示しているのに、どうして私が神のなさることを妨げることができましようか、と。17節の「神がなさること」には印がついていて、欄外に「のなさること」は補足とあります。つまり原文では「神を妨げることができましよう」という表現になっています。神を妨げることなんて誰にもできません。ペテロはこうして、これはただ神から出たことであると述べたのです。神がこれら一切の出来事を通して、明白にご自身のメッセージを語っておられるのである、と。

この説明に対してユダヤ人クリスチャンたちはどう応答したでしょうか。それが18節に記されています。まず彼らが示した一つ目の姿は「沈黙」です。彼らは示された真理の前にまず黙った。その意味をじっと思い巡らした。自分たちがそれまで持っていた考えや意見を上に持って来て優先させることをしなかった。彼らがそれまで持っていた確信は、ペテロに食ってかかるほどのものです。しかし彼らはそれをもって神を妨げようとはしませんでした。彼らは神の言葉、また神の導きの前にまず沈黙したのです。これこそ大事なことでしょう。ともするとすぐ自分の主義主張を次々に口から出しやすい私たちにとって、まず黙つてもう一度よく考えること。そこで神が語っておられることは何か、耳をそばだてて聞くこと。これは祝福に至る通路です。

そしてその時、彼らも分かった。それは神はいのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになったのだ！ということです。ここにはいくつかの心に留めるべき大切な真理があります。その一つは「いのちに至る悔い改め」という表現です。この意味は、悔い改めはいのちに至るということです。悔い改めは私たちが永遠の命へ導くということです。いかに悔い改めは私たちに

とって重要か、私たちにとって永遠の祝福のカギを握る事柄か、ということです。悔い改めとは人生の方向転換であり、これまで神を無視し、自分勝手な誤った生き方をして来たことを認め、悲しみ、神に立ち返ることです。これからは神の御言葉に沿って、神と共に歩む歩みを願ひ、そのように歩み始めることです。しかし悔い改めはそこにとどまりません。この悔い改めはいのちに至ります。それは永遠の命へ通じるのです。私たちは今ここで、聖書が述べている悔い改めに進むなら、それは命に至る門を開いて、祝福の道を進むことなのです。

二つ目は、この「悔い改め」を神が与えたと言われていることです。悔い改めはもちろん私たちがすることです。神が悔い改めるのではなく、私たちが悔い改めるのです。聖書の多くの箇所「悔い改めなさい」と語られています。そのことはこれが私たちの義務であることを示しています。しかしその悔い改めは、神が与えて下さって初めて可能になるものである、ということがここに言われています。すなわち悔い改めは神の恵みであり、神の賜物であるということです。Ⅱテモテ2章25節：「もしかすると、神は彼らに悔い改めの心を与えて真理を悟らせてくださるでしょう。」 私たちは「悔い改めなさい」と言われており、私たちが悔い改めるのですが、私たちがその道を進んで救いを得ても、それは私が悔い改めたからだ胸を張ることはできない。それも神が私に与えてくださったのです。神があわれみをもって私に働きかけてくださったので、それができたのです。すべての栄光はただ神に帰されるのです。ですから私たちは神の恵みを祈りつつ、熱心な悔い改めへ進むべきです。また他のどんな人に対しても、神がその人に悔い改めの心を与えくださるようにとりなしつつ、福音を伝えて行くべきです。

そして三つ目に、何と言ってもここの驚きの中心は、この悔い改めの恵みを神は異邦人にもお与えになった！ということです。18節の括弧の中の言葉で、原文で先に来ているのは「異邦人」という言葉で、そこに強調があります。つまりユダヤ人クリスチャンたちが沈黙し、思い巡らして得た結論はこのことです。「では、異邦人にも神はいのちに至る悔い改めをお与えになったのだ！」異邦人はユダヤ人から見て何の資格もない、取り上げるにも値しない人たちです。しかしその彼らにも、神は救いを与えることをご自身の御心としておられる。まさに一方的で、無償の神の恵みです。ユダヤ人たちはただただこのことに驚いたのです。そしてそこから賛美が出て来たのです。このような恵み深い神が私たちの神であるということを思い、神の御名をほめたたえずにいられたのです。

以上の箇所から私たちは何を学んだら良いでしょう。まずそれは沈黙することの重要性でしょう。私たちもそれぞれ自分の考え、意見、持論を持っているでしょう。そこに自分のメンツやプライドもかかっているかもしれません。しかしいつも神が語っておられる真理に沈黙して深く聴く。今日のメッセージに対してもそうです。神はここにご自身が秘めて来られた大切な御心を示しておられます。もう異邦人宣教の御心が示されてから何千年も経っているから、今さらその時のことを詳しく振り返る必要などないとは言わない。神がここで語っておられる御心に沈黙して聴く。神は異邦人にも命に至る悔い改めを与えんとして、慎重な摂理をもってこのことを示されました。そして今この時も、命に至る悔い改めが私たちに差し出され続けます。いかに神が私たち一人一人の救いをお心にかけてくださり、そのために働いてくださっ

たかを私たちは思うべきではないでしょうか。その神のお心に思いをひそめる時に、私たちはこの神の御心に感謝をもってお答えするようにと促されるのではないのでしょうか。

そしてこれと切り離せないのは、私たちがこの月、祝おうとしているクリスマスの出来事でしょう。神は全世界の罪人の救いのために、ご自身の大切な独り子を私たちのところに送ってくださいました。神の子であるお方に人間性を与えて遣わし、私たちの代わりに完全に義を全うする生涯を送り、最後には私たちの罪をその身に背負って私たちの罪の値を全部支払ってくださいました。私たちの救いに必要なことはすべてこの方が成し遂げてくださいました。神は全世界の人々をこの方によって救うことを計画し、ついにその方の成し遂げたみわざに基づいて、どんな人でもただ恵みによるこの救いを得るようにと招いてくださっています。私たちはこの神のみわざとメッセージの前に沈黙して、深く思いを巡らしたい。そして神が差し出してくださっている救いを心から感謝して自分のものとして受け取り、御名を賛美し、この素晴らしい恵みの神を宣べ伝える歩みへ導かれて行きたいと思います。